

平成 18 年 10 月 30 日

文責 一戸渉

総合研究大学院大学・北京日本学研究中心
学生合同研究会議事要旨

記

平成 18 年 10 月 20 日、北京日本学研究中心において、学生企画事業「文化創成の場としての名所研究プロジェクト」の一環として、本学学生及び北京日本学研究中心との学生合同研究会を開催した。以下に、当日の研究会のプログラム及び、議事要旨について報告する。

2006 年 10 月 20 日 於北京日本学研究中心

プログラム

第 1 部 合同研究発表会 ※1

13:00 ~ 開会式、および参加者自己紹介 ※2

13:20 ~ 発表① ※3 一戸 渉 (総合研究大学院大学大学院生)
「筆跡鑑定家 上田秋成」

13:35 ~ 質疑応答① ※4

13:50 ~ 発表② 奥本素子 (総合研究大学院大学大学院生)
「資料館・図書館における古文書のデジタル化とその課題」

14:05 ~ 質疑応答②

14:20 ~ 発表③ 紅林健志 (総合研究大学院大学大学院生)
「忠臣義士の物語としての『本朝水滸伝』」

14:35 ~ 質疑応答③

14:50 ~ 休憩(10分)

15:00 ~ 発表④ 田 豊 (北京日本学研究中心大学院生)
「『ノルウェイの森』の不公平な対極構造」

15:15 ~ 質疑応答④

15:30 ~ 発表⑤ 岳遠坤 (北京日本学研究中心大学院生)
「地名の考察から主題論へのアプローチ——『蛇性の淫』に関する一考察」

15:45 ~ 質疑応答⑤

(休憩なし 第 2 部へつづく)

第 2 部 パネルディスカッション テーマ「日本文学における古典受容」※5

16:00 ~ 基調報告 1 七田麻美子 (総合研究大学院大学大学院生)

「日本における『源氏物語』の受容と古典教育の一般傾向」

16:15～ 基調報告 2

佐山美佳（総合研究大学院大学大学院生）

「日本における『西遊記』の受容 — 「古典文学」最大のメジャーについての考察 —」

16:30～ 休憩(10分)

16:40～ 討論会 ※6

～ 18:00 終了

- ※1 第1部の研究発表会については、司会者を1名おくこととし、全体の進行にあたる。
- ※2 開会式については、先生方よりお言葉を頂戴した後、参加者一人当たり3分以内で簡潔な自己紹介を行なう。簡単な経歴や研究分野の紹介を主とする。
- ※3 発表は日本側から3名、中国側から2名、時間は各15分、内容は自分の研究分野についての紹介を基本とする。
- ※4 質疑応答も時間は15分、発表内容に関することとともに、発表者の研究分野に関することなども含むものとし、発表とあわせて参加者の相互理解を深めることを目的とする。
- ※5 第2部のパネルディスカッションでは、「日本文学における古典受容」をテーマに掲げ、基調報告を日本側2名で行なう。
- ※6 パネルディスカッションにも司会(コーディネーター)を1名置き、「日本文学における古典受容」をめぐって活発な意見交換を促すこととする。

第1部・合同研究発表会①②③発表要旨

一戸 涉「筆跡鑑定家 上田秋成」

既に中国語での翻訳書も刊行されている『雨月物語』、『春雨物語』（閻小妹『雨月物語・春雨物語』中国人民文学出版社、1990年）の作者、上田秋成（1734～1809）について、本発表では、従来全くと言ってよいほど注目されていない筆跡（古筆）鑑定家としての側面を取り上げてみたい。上田秋成に関する研究の現状（日中間わず）として、小説家としての側面がとりわけ強調されているが、在世当時の認識としては、彼はまず第一に日本古典について深い造詣を持つ国学者（和学者）であり、また中華趣味溢れる文人の一人であったというべきであろう。

筆跡に対する尊重の意識は、それ自体、書に関する長い伝統を持つ中国伝来のものである事は言うまでもないが、日本では室町時代以降、茶の湯の発展と共に古筆鑑定が盛んに行われるようになり、より時代が下って秋成の生きた近世中期以降には、在野の文人達の生業の一つにもなっていた。秋成が自ら記した鑑定書は、現在、少なくない数が残されている。いくつか具体例を挙げれば、西尾市岩瀬文庫蔵『伊勢物語童子問』（荷田春満筆と鑑定）、学習院大学蔵『蜻蛉日記』（契沖筆と鑑定）、広島大学蔵『古今和歌六帖』（契沖筆書入れと鑑定）などが挙げられる。しかし実を言えば、これらの秋成の鑑定はほとんど正しいものがない。この点、秋成が良き鑑定家であったかは疑問とせざるを得ないが、一方で、

こうした資料の存在からは、当時の秋成周辺の人々にとって、契沖、荷田春満といった一回り前の時代の国学者の筆跡を、秋成ならば熟知している筈である、との認識があったことが読み取れる。

また秋成は特に平安時代の歌仙紀貫之の筆跡について、さまざまな機会に繰り返し言及している。早くは天明四年（1784）に貫之筆として伝わる『古今和歌集序』の古写本を目にしており、また『土佐日記』の貫之自筆本を写したとする古写本を得て、自ら筆写したことなどもある。こうした筆跡を通じた古典の受容をめぐって、秋成及び同時代の人々の、先人の筆跡に対する認識について考察を試み、特に天明八年の京都大火を期に古筆、ないし古文獻に対する秋成の認識が変化したであろう可能性を指摘したい。

奥本素子「資料館・図書館における古文書のデジタル化とその課題」

文書を電子化して保存・活用しようという動きは、世界的に広まっている。現在、新旧含め様々な文書がデジタル化されている。文章をデジタル化する目的は多様だが、その中でも注目されているのは、古い文書をデジタル化することによって半永久的に保存する試みである。イギリスでは大英図書館を中心にイギリス国内・国外の主要な図書館が所蔵する18世紀の刊行文献約50万点のうち20万タイトルを選び、マイクロフィルムにして複製・販売するというプロジェクトが1980年代より始まった。アメリカでもDigital Library InitiativeやNational Science Digital Libraryなどの国家プロジェクトが既に大々的に行われている。またアメリカでは議会図書館を中心にあらゆる文書、絵画、音楽などを電子化して残す『アメリカン・メモリー計画』が進んでいる。

しかし文書を電子化することによっていったいどんなメリットがあるのか、ということはまだ明確にはなっていない。活用ということを考えれば、現在の技術で簡易なデジタル化を目指していくことになる。一方、保存目的であれば、大量のデータを一気にデジタル化してしまうのは非常に危険である。例えば現在の電子化技術が将来、半永久的に利用できるわけではない。（例えば今レーザーディスクで保存していたデータは書き換えなければいけない。）文書データの保存と活用というジレンマに日本の文書館、図書館はどう対処しているのだろうか？ 事例をあげて紹介する。

紅林健志「忠臣義士の物語としての『本朝水滸伝』」

芥川龍之介は、その中国紀行『江南游記』の中で、わが国の『水滸伝』を粉本とする翻案ものを取りあげて、「水滸伝らしい心もちは、そのいづれにも写されてゐない」と評している。本発表では、芥川もその名を挙げている『本朝水滸伝』を取りあげ、その実態について考察を加えることを目的としている。

近世において読本といったジャンルの中で、『水滸伝』を粉本とした作品は数多い。有名なものだけ挙げても、『湘中八雄伝』『本朝水滸伝』『女水滸伝』『忠臣水滸伝』『南総里見八犬伝』などなど。こうした作品群の中で、『本朝水滸伝』を特にとりあげるのは、この作品が近年、高田衛をはじめとするすぐれた研究の成果によって、「反乱」の物語として位置づけられてきたためである。本発表では、芥川の言説に対して、現在の研究史の立場を明らかにし、総括を行う。加

えて、『本朝水滸伝』の基本的性格を明らかにすることを企図している。それはやはり、「忠臣義士の物語」という範疇に入るものとなるであろう。

『本朝水滸伝』は安永二年、建部綾足の手によってものされた、いわば初期読本に分類される作品である。高= (コウキウ) を弓削道鏡に、宋江を恵美押勝に擬したこの物語は、俗説の類をふんだんに利用している。特に、道鏡は史実において河内国出身とされているのだが、『本朝水滸伝』では伊予国出身と変更が加えられている。確かに、先行の研究史にも指摘があるとおり、伊予の国、弓削浜には道鏡出生の俗説が伝えられている。しかし、上代史に対するさまざまな文献を博搜していたと考えられる作者綾足が、なぜこの伊予出生説を用いたのか、という問題は残る。本発表ではこの問題について考察を加える。それは同時に、従来言われてこなかった、忠臣義士の物語としての『本朝水滸伝』の性格を明らかにすることにもつながっていくであろう。

田 豊 『ノルウェイの森』の不公平な対極構造

直子と緑をめぐって

直子と緑は対極の人物である。「直子という存在の対極にあるというか、対立する存在としての緑を出してきた時点で小説はもうできたようなものだったわけです。」と作者自身もそれを認める。直子は「死」であるのに対し緑は「生」である。直子は非現実の世界のすみ人であるのに対し、緑は生の現実を代表する人間である。しかし、そのような緑と直子の地位は対等ではない。作品の冒頭で示したように、『ノルウェイの森』は直子の存在を覚えておくための回想の文章である。主人公の「僕」は直子にずっと責任感と罪意識を抱いているのである。それに対して、作者は緑を軽蔑する傾向がある。例えば、酒井英行が『ノルウェイの森』の村上春樹で指摘したように、作者は直子死後の緑と僕との愛情の行方を語らないのは「緑に対する責任の放棄と言うべきであろう。」そして、作品の冒頭で37歳の「僕」は20歳前後を回想する際に、緑のことに少しも触れたことがない。ラストシーンの「君とどうしても話がしたいんだ。話すことがいっぱいある。」「世界中に君以外に求めるものは何もない」という緑への呼掛けはどれほど本音であるかと読者は疑わざるを得ないだろう。作品の冒頭と結末は呼応できない状態にある。そのことは均衡のとれない対極構造と関係ないではないだろう。作家は直子のイメージを豊満にするにつれて、緑の存在を大きくした。直子のイメージを脅かさなため、作者は緑をわざと冒頭で書かなかったり、結末で「僕」を緑の世界に還さなかつたりすると私は考えている。もしかして、それは不公平な対極構造が作品に存在する要因であろう。

岳遠坤 「地名の考察から主題論へのアプローチ——『蛇性の淫』に関する一考察」

『蛇性の淫』の主題について、従来、さまざまな論説があり、いまでも統一する見解が見られない。本論は主に男女主人公の出会いの場所—新宮（及び三輪が崎）、再会の場所—石榴市、別れの場所—吉野という三つの場所設定をめぐって、『白娘子永鎮雷峰塔』の設定との関連と相違を考察したい。これを通して、秋成が創作する際に念頭に置いた『源氏物語』の世界と和歌、および当時こういう地名から連想させられる伝説や物語などについて考察し、秋成の創作意図をさぐり、『蛇性の淫』の主題へアプローチしたいと思う。

第2部・パネルディスカッション基調報告要旨

七田麻美子「日本における『源氏物語』の受容と古典教育の一般傾向」

日本古典文学においてもっとも有名な作品の一つに『源氏物語』がある。その現代における享受は主に現代語訳によるものであり、1996年以降の、瀬戸内訳完成を受けての「源氏フィーバー」の例をとっても、明快な現代語訳の存在の意義は大きいといえる。但し、『源氏物語』諸訳のうち、もっとも有名かつ発行部数の多いものはコミック（漫画）の大和和紀『あさきゆめみし』であることは周知のところである。今回はこの現象について、現代の日本における国語教育と古典受容のありかたという視点から考察する。

『あさきゆめみし』がベストセラーであることの背景に二つのことが比定できると考えている。一つはそれが美しい絵を持つコミックであること、もう一つはそれが繰り返し教育現場で喧伝されていることである。この教育現場での『あさきゆめみし』の利用は、おそらく1990年代以降、中等教育機関（主に高等学校）などでも当然のこととして受け止められている。

『あさきゆめみし』の受容に見られる、絵が重要な媒体であること、教育現場で利用できるものであることという二点に関しては、実際には現代に限定される特徴ではない。このことについては江戸の刊本の受容状況などから伺える。歌学における『源氏物語』梗概書の存在などもその例である。これは利用を目的とした古典受容ということになる。

こうした、「利用できる古典文学」として、最近注目を集めているのが『論語』等の漢文作品である。2006年8月に一部でニュースともなった、文部科学省中央教育審議会（中教審）の、「古典復活」への検討体制の中には『論語』の復権ということもうたわれている。こうした近年の日本の教育現場における漢文教育の変遷を見ることにより、古典受容の基礎にある社会状況を確認できるものと考えられる。

「利用できる古典文学」を除いた場合、一部の熱心な読者の存在は認められるものの、事実上、現代日本においては古典離れが著しいと言える。さらに読書離れが警告されてもいる。こうした現状を踏まえて、その根底にあるものを俯瞰したいと考える。

佐山美佳「日本における『西遊記』の受容 — 「古典文学」最大のメジャーについての考察 —

日本文学における中国文学の影響は自明のこととして捉えられており、近世までの古典文学研究はもちろんのこと、近代文学においても中国文学や文化の受容が指摘されることは言うまでもない。たとえば谷崎潤一郎、芥川龍之介、横光利一、金子光晴らのように中国の地に直接赴いて刺激を受け作品を物した作家もさることながら、中島敦のように古典としての中国文学を血肉化することで独自の文学世界を形成した作家も存在する。こうした中国文学や文化の受容を踏まえた論考は、研究対象としての時代区分を問わず、すでに興味深い論が提出され、各専門分野においてそれぞれ深化を遂げている。

しかしながら、今回はあえて専門分野の障壁をこえて議論するために、日本に伝えられた中国古典文学の中でもっとも著名、かつ今日も愛され続けている『西遊記』に注目することとした。

日本では江戸初期に明より伝えられ、その後、宝暦年間に西田維則訳『通俗西遊記』が

刊行されたことで一般に広まった。江戸後期を代表する戯作者のひとりである滝沢馬琴も、この訳本の影響を受けたといわれている。その一方で、内容を日本人好みに改変し、視覚で捉えにくい妖魔の姿を形象化した人形浄瑠璃『五天竺』も創作され、以後、『通俗西遊記』とともに、『西遊記』の流布を助けてゆくことになる。

近代における『西遊記』と文学とのもつともドラマチックな邂逅は、先に名を挙げた中島敦の功績によるところが大きいだろう。「沙悟浄」に実存的な苦悩を抱えさせ自意識のゆらぎを表現することによって、『西遊記』を子供向けの読み物から「近代小説」へと見事に飛躍させたのである。

さらに現代に目を向けるならば、他の古典文学作品と比較してみても、明らかに特異な展開を見せていることがわかる。1950年代以降、繰り返し子供向け絵本などに取り上げられた「孫悟空」の物語は、手塚治虫が劇画やアニメーションに作品化することで、サブカルチャーの分野において一つのメジャーになってゆく。そして、日中国交が正常化した1970年代のテレビドラマ「西遊記」の放映も看過すべきでない。中国国内で撮影されたというエキゾチックな映像とともに登場人物のイメージは固定化され、現代の日本における「西遊記ドラマ」の金字塔となった。そこから見出せる問題点としては、「(女優が演じることによって)欲望の対象となる三蔵法師像」「カップ(日本の滑稽な妖怪)と沙悟浄像の融合」などが挙げられる。先述した人形浄瑠璃「五天竺」の例も含め、このような日本の変奏の淵源を探るには、江戸期からの連綿たる「西遊記」に関連するイメージの展開や、日本における文化現象との相関性など、様々な視点から考慮しなければならないだろう。

今回の報告は、このような古典文学としての変遷をたどるとともに、他に類例のない頻度で繰り返し映像化や翻案化がなされる「西遊記」の大衆性とその魅力の解明を試みたい。古典受容という時系列からの文学展開と、日中文学の交流という水平的な文学展開の双方から捉えてみたいと思う。

以上